

ゼロから
外資系企業の
部長になった私の
30歳からの
仕事術

Failure is Success
If We Learn
From It.

はじめに

24歳で結婚。当たり前のように専業主婦となり、何不自由ない暮らしをしていたが、30歳を目前に離婚。自活するために大阪のネジ工場で一般事務の派遣の仕事を始めたのが、私のキャリアのスタートだった。

当時、6畳1間の部屋で布団に入って天井を眺めながら、「一生こういう生活をするのだろうか」と不安になったことを鮮明に覚えている。

そんな「ゼロ」からのスタートだったが、このままではいけないという危機感をバネにして、医療機器会社の営業に転職した。それを皮切りに、外資系企業でキャリアを築き、今は部門長として働いているのだが、年収も当時と比べて7倍になった。

こんな話をする、学歴やスキルなどの強いバックボーンがあるからだとか、底抜けにポジティブな素晴らしい人柄なのかと多くの人は想像するかもしれないが、残念ながら私には誇れるものが何ひとつない。

特に人柄にいたっては本当にネガティブで、自分に自信がないからオドオドして周

りの評価ばかり気にしている。ああ、あんなこと言わなきゃよかった、あのメールどう思われているのかな？ などなど、毎日家に帰って、ひとり大反省会である。

打たれ弱いし、ひどいときは打たれてもいないのに、勝手に悪い想像をして落ち込んで、もう何もかも終わりにしたいと逃げることばかり考えていたりする。

人生だって失敗の連続だ。プライベートでは30歳を目前にして離婚も経験しているし、子どももない。恋愛だって失敗続き、仕事でもコミュニケーションが苦手部署下全員にパワハラで訴えられたこともあるし、リストラは2回も経験している。

こんなダメOLだった私が、ゼロからキャリアを築いてこれた要因は何だったのか？ それは、他人よりいっぱい失敗したからではないかと思う。

これからのキャリアに、特別なスキルなんて不要だ。スキルなんて後でいくらだって身につけることができる。まずは恐れずに、他人よりいっぱい失敗をして、もがいてほしい。失敗を恐れて、引きこもっていても何も得るものはないのだ。

私は生まれたときからずっと、周りから与えられてばかりで、自分に自信がない人間だった。今では、自信のないネガティブな自分と、経験に裏打ちされた自信に満ち

た自分が同居しているように思う。離婚して、経済的にも自立して、たくさん失敗と困難を乗り越えて、自信とパワーに満ちあふれたもうひとりの自分が生まれた。

当時の私と同じように、将来に漠然とした不安を抱えながら、どうやって生きていこうかを模索している人は、世の中にたくさんいるんじゃないかと思う。

キャリアや人生に壁を感じている人、もっと仕事にやりがいを感じたいと思っている人、そんな人にこの本を通じて私の経験をシェアしたい。

何度失敗しても、先が見えなくても、諦めなければ成功できると伝えたい。勇気を出して新しい一步を踏み出す、その一助になればと、そう願っている。

第1章

自立

Independence

はじめに 3

プロローグ 14

不可能を可能にする

28

自分なりに工夫する

36

第2章

覚悟

Resolution

一歩前に出てみる

44

腹を決める

49

人の助けを借りる

53

相手を尊重する

58

試練に立ち向かう

62

第3章

協働

Cooperation

ブレない心を持つ 68

自分のファンをつくる 74

成果を急がない 79

理想の自分をイメージする

82

第4章

転機

Opportunity

部下の適性を見極める 88

短時間で結果を出す 92

心を整える 97

第5章

使命

Mission

上司はあえて悪者になる

104

トラブルで焦らない

109

部下とともに成長する

112

提案してチャンスをつかむ

117

上司の顔を立てる

120

第6章

創出

Creation

他人の評価にとらわれない

126

積極的に人と会う

130

フィットする場を選ぶ

134

ハードルを乗り越える

140

第7章

信頼

Trust

正しいプロ意識を持つ 146

逆境でも笑顔を絶やさない 151

部下を信じる 160

正しいことをやり抜く 168

自分を超越る部下を育てる 172

第8章

挑戦

Challenge

環境のせいにならない 180

人を巻き込む 186

他人を責めない 190

チャレンジ精神を忘れない 197

失敗しても起き上がる 201

おわりに 205

仕事で身につけたスキルやそこで得た教訓の話に入る前に、以前の私が一体どんな生活を送り、今のキャリアを築くに至ったのかをお話したいと思う。少し長くなるけれども、今の私を形づくるベースになったところでもあるので、どうかお付き合いいただきたい。

1 自我の目覚め

何不自由ない専業主婦の生活から今のような道に進むきっかけとなったのは、「一匹の犬」だった。

小学校から高校まではいわゆるお嬢様育ち。大学時代もバブルと空前の女子大生ブームで、その恩恵を受けた。

就職も超がつく売り手市場だったので、一流と呼ばれる会社に苦労することなく入ることができた。仕事といえば、いわゆる雑用仕事ばかり。前の日にあった海外取引の数字を日銀フォーマットに埋めるだけで、5分もあれば完了する。数字を入れるの

に5分、繰り返しコピーして劣化した日銀フォーマットの枠に線を引くのに20分、日銀までの往復に10分。

こうして、朝の9時半には1日の仕事すべて終わってしまい、あとはデスクで雑誌を読んだり爪のお手入れをしたりして時間をつぶし、終業の10秒前から時報をスピーカーでカウントダウン。定時になると同時に女性社員は一斉に帰るという毎日で、私は世の中を完全になめきっていた。

そして24歳で結婚し、関西での新婚生活がスタートする。理想の家を建てて、週に1〜2日しか帰ってこない夫の帰りを待つ日々。心配性の夫には、旅行はおろか友だちとお茶することさえ禁止されていたので、とうとうやる事がなくなった。このやり場のない悶々とした気持ちを夫に訴えてみたところで、まったく取り合ってもらえなかった。

そんなある日、私が寂しいだろうからと、彼が子犬を買ってくれた。そしてその子犬にも、おもちゃでいっぱい6畳のお部屋が与えられた。バブルが崩壊していたというのに、私は呑気だった。身なりを整え夫の帰りを待つ「理想の妻」を演じる生活が続いた。

そして、30歳を目前にした頃だろうか。自分は何のためにいるのだろうかと考えるようになった。両親にも一度も反抗したことがなかった私の、遅すぎる自我の目覚めだったと思う。この庇護されるばかりで、贅沢だけ自由のない、何も生み出さない生活に対しての漠然とした不安が、次第に自分を苦しめるようになった。でも私は、具体的に何かアクションを起こそうともせず、ただぼんやりと過ごしていた。

そして、事件は起こった。

仕事から帰ってきた夫に、「家にいるときは犬が邪魔だから、部屋から出さないでくれ」と言われたのだ。その一言がきっかけで、自分の中で何かが弾けた。

おやつとたくさんのおもちゃに囲まれて、必要のないときには部屋にしまわれてしまう、愛玩以外の何ものでもないペットという存在。それって、私も同じなのではないかと思った。自分が生きている価値は何なのだろうか、与えられてばかりで何も返せない自分には一体何の価値があるのだろうかと考えた。今までは漠然としていた不安が、急に鮮明になったのである。

今の自分ならば、毎日綺麗にしていることが彼にとって価値があるのだからと納得もできるだろうし、それ以外の価値を自分でつくれば良いと考えられる。けれども、

まだ若くて未熟だった私は、そういったことが想像できなかった。

当時は、まだインターネットもそんなに普及していない時代。社会とつながることが今よりも難しかった。ひとりの日は、本を10冊以上読んで時間を潰す、あとは彼からの電話を待つのみで、彼以外の人と話すことが減多になかった。人より贅沢な暮らしをしていたし、仕事もしないでそんな生活ができるのだから不満を言っては罰が当たる、そう思って無理矢理自分を納得させていた。

でも、一度できてしまった溝というのはたぶん、完全に元に戻ることはないのだ。

彼と口論するようになり、自分の気持ちを知ってもらえないことに対して、私はどんどん絶望していった。与えられているだけの人生で終わりたいはなかった。自分も妻として、家族として何かしたかったし、誰かに必要とされたかったのだ。

子どもができればまた違ったのかもしれない、いや、子どもがいても同じことだったかもしれない。私はまだまだ未熟で、自分がそのときできることが何かまったく見えていなかった。

何度も口論を繰り返した末、「とにかくこの家を出よう、自立しよう、そうしないと自分を変われない」、そんな考えにとらわれていった。自分の都合で周りの人間を

巻き込み、そして傷つけた。そして、その事実すら気づいていなかった。もっと私は努力できたのではないかと今になって思うが、もう一度時間を巻き戻せたとしても、私は離婚することを選ぶと思う。離婚というより、自立」というのが正しいかもしれない。

今、誰かに「仕事は大変ですか？」と聞かれたら、「すごく大変です」と間違いなく答える。プレッシャーや人間関係、社内政治と悩みは尽きないし、いつリストラされるかだってわからない。でも私は、今の自分に何ひとつ不満はない。自立できていることが、すごく幸せなのだ。

結婚していたときも自由にお金を使えたが、どこかで遠慮していたし常に罪悪感がついてまわった。今は、自分が稼いだお金を何の罪悪感もなく好きなように使える。会社で賞をいただいて、その賞金でほんとバーキンを買ったときは、むしろ誇らしかった。これが未だに嫁にいけない理由のひとつかもしれないが(苦笑)。

2 経済的な自立

精神的に極限まで追い詰められていた私は、別居ができたときは、嬉しさというか

達成感のようなものでいっぱいだった。そして大阪の小さなネジ工場で派遣の仕事を見つけた。

最初に借りたのは、西宮にある形ばかりのキッチンがついた6畳一間の部屋だった。最初は嬉々としていたが、仕事から戻ってきてきてベッドに入ると低い天井が嫌でも目に入る。自分は60歳になってもこんな生活をしているのだろうかと不安に思い、息苦しい気持ちになった。今でも、あの風景は私の心に残っている。

初めての派遣での生活は、本来なら仕事を覚えるのに必死にならなきゃいけないはずなのに、派遣じゃ一食食べられない、事務じゃ食べてはいけないと、不安でいっぱいだった。低い天井は、毎晩私にプレッシャーを与え続けた。

毎晩のように将来のことで悩んでいくせに、正式に離婚できたときは清々しいくらい気持ち良かった。通帳を旧姓に戻しに銀行に行ったら、窓口の人に「結婚ですか」と聞かれたので、「いえ、その逆です」と答えたのだが、きつとそう思われてしまうぐらいに嬉しそうな顔をしていたのだと思う。窓口の女性と目が合っ、お互いに笑ってしまった。スヌーピーの通帳を見るといつもそれを思い出す。

3 正社員になろうと決意！

後悔はしていなかったが、とにかく不安だった私は、一生ひとりで生活するには派遣ではなく正社員でなければならぬと考え始めていた。派遣から正社員になる方法といえば、働いている会社で実力を認められて正社員になるというのがまずは考えつく方法だが、東京に早く戻りたかった私には使えなかった。

インターネットがない時代だったので、新聞広告や求人掲載されている雑誌、いろいろなものを探したが、なかなかよい仕事が見つからない。そもそもスキルがないうえに、関西にいて東京での仕事を探そうとしているのだから当たり前である。

そんなとき、派遣の仕事を斡旋してくれた会社の求人一覧に、正社員募集の記載があるのを見つけた。これはと思ったが、正直、スキルがないし、いきなり東京なんてあまりにも無謀で恥ずかしくて言えないと思い、なかなか行動に移せなかった。

しかし、私は極限まで追い詰められていた。というより、自分を追い詰めていた。60歳の自分が路上生活をする姿すらちらついていた。そして、とうとう私は決心した。

何もしなければ何も始まらない、呆れられたり笑われるのは恥ずかしいけれども、ダンボール生活は絶対無理な気がするし、もう明日には60歳になるんじゃないかというくらいに焦って、社員の仕事を紹介してもらいたいと当たってみたわけだ。

そのときの私の条件はひとつ、営業をしたいということだった。一生続けられる仕事であることが本当の条件だったわけだが、一生続けられるのは営業しかないとなぜか堅く信じていた。あとは東京で仕事がしたい、東京に戻りたいと、そう思っていた。

ちなみに、私はコミュニケーションが大の苦手だった。今でも得意なほうではない。人が苦手だし、そもそも他人にあまり興味が無い。興味が無いから話も続かないし、好かれない。ましてやモノを売るなんて絶対無理。頭の片隅ではわかっていたが、一生続けるには営業しかないと思っていたので、自分が営業に向かないことなどすっかり忘れていた。とにかく私は思い込みが激しいのだ。

そんなわけで、営業という仕事を私が果たしてできるのかといった疑問など持たずに、堂々と「東京で正社員の営業の仕事はないですか？」と聞いてみたわけである。

運がよかったのか、あまりにも堂々としていたためか、（呆れられて困らせてしまうかとも思っていたのに）あっさり、「この仕事はいかがですか？」と返ってきた。それが、私のキャリア形成の最初のステップになる外資系の医療機器の営業の仕事だった。

希望している営業で、経験がなくても大丈夫、東京勤務、また、東京までの引越費用、住宅初期費用や営業に使う車の補助など、当時の私には至れり尽くせりの好条件で、お給料も派遣のときに比べたら段違いによかった。間髪入れずに、「受けます！」と即答した。

4 覚悟が大事

派遣社員から正社員にというのは、とても大きなステップだと思われる方が多いのではないだろうか。30歳を目前にしたスキルも何もない女性にとってはなおさらだろう。そう思っている人には酷かもしれないが、尋ねたい。

あなたはどれだけ本気で正社員になりたいのか？

何をおいても正社員になりたいのか？

それともこういう仕事で正社員になりたい、あるいは、こういう条件で正社員になりたい、正社員になるだけじゃなくて他にも条件をつけていないか？

本当は今のままでもいいと、心のどこかで思っているのではないだろうか。

自分の何かを変える、決断をするというのは強い意志が必要だと思う。もうダメだ、このままじゃいけないと、悩んで悩んでもがいて、そしてやっと決断できる。他の選択肢なんてもう考えない。もう自分にはこれしかない、と強く思い込むことが大事だ。決断できないのは、厳しい言い方をすれば、結局は現状に満足しているだけなのである。不満はあるが決断できないというのは、決断できるほど追い詰められていないか、決断できるほど強い思いがないかだと私は思う。自分はこの仕事に向いていないとかいろいろ言い訳をつけて決断していない、ただそれだけだ。

自分に何ができるかではなく、自分が何を求めているか、ただそれだけを考える。あれもこれも叶うことなんて普通の人の人生にはそうそうないが、ひとつ、これだけ！と絞れば意外とどこにでもチャンスは転がっているのだ。

5 優先順位を決める

結婚できない人はあれもこれもとなかなか決められないといった話を聞いたことがあるが、それとまったく同じだと思う。自分が欲しいものが何かがわからず、その優先順位が決められない人は運をつかめない。

今、もやもやとしている不安や不満があつて、何かを変えなきゃと漠然と思つているのなら、一度その不安とことん向かい合つて考えてみてはどうだろうか。

自分にとつてもっとも大事なものは何か。

仕事のやりがいとか？

やりたい仕事をする事とか？

お給料か？

一生続けられるという保障か？

ワークライフバランスを保つことか？

そのどれでもないほかの何かなのか？

それは派遣だと手に入らないものなのか？

正社員になれば必ず得られるものか？

そうやって自分にとって大切なことは何かを考えてみてほしい。

例えば、やりたい仕事をする事であれば、「やりたい仕事に必要なスキルを得る」「派遣でもいいのでやりたい仕事に就く」。仕事のやりがいであれば、「やりがいの源になつているものは何か考える」「それが派遣でも達成できるものであれば派遣でもよし、達成できないのであれば、必要なスキルをつけ経験を積む」。お給料であれば、「仕事の種類は問わない」など。

多くの人は、やりがい、好きな仕事、お給料、ワークライフバランスのすべてを望むのではないだろうか。でも、すべてはいっぺんに手に入らない。順番にステップを踏んで望むものを手に入れていく、その途中で挫折しないように、まずは最も大切なものから手に入れることを考えてみてはどうだろうか。

最も大切なものを手に入れば心に余裕ができる。そしてそこから順番にひとつひとつ手に入れることを楽しんでみるのもいいかもしれない。

運は待っていてもやってこないし、強く意識していなければ、それに気づけない。

まずはとことん悩み、本当に今自分が欲しているものは何かを考えてみることに。

自分にとっての人生のゴール、仕事に求めているものを見つけること、それが運をつかむ第一歩だと思う。